

地域発見新聞

平成三十年十一月十日

倉敷商業高等学校

山上寧々

児島ジーンズの歴史

二〇二〇年の東京大会をきっかけに「日本を再発見しよう」というテーマで、日本遺産で開催されるプロジェクト、『ニッポンだからものプロジェクト』が、十月二十日に岡山県倉敷市にある旧野崎家住宅別邸・迨暇堂で開催された

出演者で、倉敷市教育委員会文化財保護課に所属する藤原憲芳さんによると、倉敷市の児島はもともと一つの島だったそう。だが、そこでお米を作るにあたり平地を干拓する必要があった。干拓には海水

が利用されたが、お米は塩分の弱いため、当時の人々は土の塩分を吸い取ることのできる植物を探していた。そこで注目されたのが『綿花』だった。綿花を植えると、その綿がお金になり港町が栄えたそう。

今でこそ『ジーンズ』のイメージが強い児島だが、そのルーツを探ると全く別の目的で植えられたということが分かる。今回このプロジェクトを観に来た観客は、地元岡山の人が多かった、皆この話を聞き「へえー」と声をもらっていた。このように、岡山県に住んでいてもあまり知られていない岡山県の魅力はたくさんある。



例えば、株式会社ビックジョンの執行役員で、公私共にデニムフリークの水玉竹則さんは、「ジーンズを洗って発売したのは児島が世界で初めて」だと言う。アメリカで作業服として使われていたジーンズは、日本ではあこがれの対象で当時から人気だったそう。だが日本で作られたジーンズは、新品の状態で販売されたため、カチカチでダサく売れなかった。そこで児島では、制服作りが盛んでクリーニング屋が多いという特色を活かし、ジーンズを洗濯して販売した。これが児島がジーンズの街として栄えたルーツだ。また、水玉さんはこれからのジーンズの可能性についても話してくれた。ジーンズには多くのマニアがいるため、そのマニア層に向けてビンテージもののジーンズを生み出すと児島のジーンズストリートの活性化につながるのでは言う。

現在岡山県では、駅周辺や美観地区など多くの場所でジーンズを使った小物や衣服が販売されている。児島のジーンズは、岡山県が世界に誇れるものだと思うので、まずは地元住民がその魅力や歴史を再認識することが大切だと、このプロジェクトに参加し強く感じられた。